

『肉まん大作戦』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

穏やかな五月の午後の日差しと風に、窓辺のカーテンが踊る。

部屋の中には優雅な光と影のアンサンブル、外には小鳥のさえずり。

そんな午後の優雅なひとときの中、ゆったりと読書にふける。

それは至福の時。

…と、まるで何かのナレーションみたいな表現が出てしまいそうなくらいに穏やかな時間の中、俺は一人でゆったりと過ごしていた。

何せこのところ、真琴の勉強だけじゃなくて、高木さん（拙作『薫風の丘』参照）のことで色々あったし、ものみの丘でお茶会をやったりして、こんな風に一人でのんびりとするのが随分と久しぶりな気がする。

まあ、俺の手元にあるのは純文学でも恋愛小説でもなくて、単なるマンガ雑誌だったりするのだが、それはこの際大したことじゃない。要は俺は今非常に落ち着いた気分にいるのだ。

何故、今こんなに静かなのかと言うと。

その理由は実に簡単なもので、真琴がいない——午前中はしっかりと勉強をやっていた

『肉まん大作戦』

ので俺が何も言わずにいると、午後になったら知らない間に出掛けていた——だけなのだ。別に真琴がいない方がいい……なんてことを思っていないが、ずっとあいつにかかりきりだっただけに、たまにはこんな時間が欲しいと思ってしまうわけだ。俺の立場になってみれば、誰でもそう思うに決まってる。

…まあ、そんなことはどうでもいいか。

とりあえずはこの至福の時をより楽しむために、俺は机に手を伸ばして、あらかじめ用意しておいたコーヒースティックを一口。

……。

くうー、いいねえ。

実にいいじゃないか。

いつもなら秋子さんがいれてくれるコーヒースティックだが、あえて自分で用意してこんな風に味わうのも悪くはない……そんなことを発見し、俺はまた少しだけいい気分になった。次がいづになるかは分からないが、次も自分で一通り支度をしてみよう。

と、俺が次回への微かな決意をしたとき。

それまでの静寂を打ち破って、玄関のドアが威勢良く開け閉めされた音が聞こえた。

そう、こゝまで聞こえてしまったのだ。

それがどんな意味を持つのか、俺にはすぐに分かった。

午後の優雅なひとときは何の前触れもなく、終焉を告げたのだ。

……と浸っている間にも、玄関で激しく物音を立てたヤツが、俺の予想を裏切ることなく、すさまじい勢いで階段を上る音をこゝまで響かせている。

やれやれ：もうちょっとおとなしく出来ないものかと思ったりもするが、そもそも、おとなしくなったらそれは本来のあいっじゃないしな。

大きな足音は階段を上りきって廊下を一気に走って、

やがて、俺の部屋の前で一瞬だけ止まり、

俺の部屋のドアが激しく開けられるのと同時に、大きな声。

「祐一っ！」

言うまでもないが、俺の穏やかな午後を完全に打ち砕いて、今ここに怒鳴り込むように入ってきたのは真琴だ。

それにしても、真琴が俺に怒鳴り込んでくる：と言うのも実は思い当たる節がないから困る。いや、確かに日頃から真琴のことを適当にからっていたりはするが、それは俺とこいつのごく当たり前のコミュニケーションの手段であって、そんなことで真琴が怒鳴り込んでくるようなことはない：はずだ。

「祐一っ、ないの！ 真琴のが、ないの！」

俺の部屋に入るなり、真琴は俺を思いきり睨むようにしながら「ないの」を連発し始めた。

ない：とだけ言われても、俺にはさっぱり分からない。

「ないって、何がだよ？」

「うーっ、ないって言ったら、ないの！ このバカ祐一っ！」

「だから、それじゃ分からないって言って」

待て待て。

『肉まん大作戦』

もしかしたら、この間の秋子さん特製のパイのことだろうか？

お茶会で出してくれたパイがとてもうまかったんで、残った分を真琴が欲しいとか言っていたのを無視して俺がこっそり食っちゃまったんだよね……。

「…もしかして、この間のお茶会のおきのパイのことを言ってるんだったら、すまん。残ってたの全部、俺が食べちゃまった」

俺が軽く頭を下げながらそう言うと、真琴は不意にきよとした表情に変わり、勢いもすっかりやわらいだようだった。

「…えっ？ あの秋子さんのパイ、祐一が食べちゃったの？ 真琴が欲しいって言ったの？」

しまった。

どうやらそれとは関係ないことらしい。と言うより、真琴はすっかりパイのことを忘れていたみたいで、わずかな間だけきよとしたと思ったら、すぐにさっき以上に怒ったような表情を見せた。

「祐一ってホントにサイテーっ！ 真琴の楽しみをとっちゃうなんて、もう信じられない！！」

それじゃ今までは信じてくれていたのか…と言う突っ込みをしたら、それこそ火に油を注ぐようなものだ。

それじゃ、真琴は一体何をなくしたって言うんだ？ と、俺が口に出す前に、真琴が怒ったように言い放つ。

「なくなったのはパイでも何でもなくて、真琴の肉まんよっ！」

「肉まん？ ……そんなのどつてあったか？」

「あうーっ、もう本当に祐一はバカねっ！」

「お前さっきから感嘆符つきまくりだぞ」

「うるさいわねっ！」

「ほら、まただ。とまあ、それはともかく、少しは落ち着いて欲しいもんだな。さっきからお前の言ってることは、脈絡がなくて全然分からないぞ」

「混乱させてるのは祐一じゃないの」

まあ、それは確かに物事の一面を見れば、そうかも知れない。だが、俺とて単に混乱させるだけのつもりではなくて、結果としてそうなってしまったと言うことなのだ。

「じゃあ、もう一回頭から整理してみようじゃないか」

「うん」

俺の提案に真琴はおとなしくうなずいた。珍しいと感じるかも知れないが、実は真琴はこんな風話を持っていくと素直に従うのだ…と最近になって俺も気がついた。

「まず、肉まんはどこにあるはずだったんだ？」

さっきからずっとドアのそば立っただまま騒いでいた真琴に向かって、ちょいちょいと手振りで床に座るように示しながら、俺はゆっくりと質問を始めた。

「お店に決まってるじゃない」

ぺたんとトンビ座りになって、俺の方を少しだけ見上げながら真琴がさらりと、いかにも当たり前じゃないのと言わんばかりの表情で答えた。

「お店って、コンビニか？」

『肉まん大作戦』

「そうよ」

俺の再度の質問に対してなおも、真琴は「当たったり前じゃない。祐一はそんなことも知らないの?」と言った感じで、短く答えるだけだ。

軽い頭痛を感じながら、俺は念のために真琴に確認することにした。

「…で、一応訊くが、お前はコンビニに肉まんでも予約してあるのか?」

「予約? 肉まんの予約なんて出来るの?」

「普通はそんなもんじゃないだろうし、受け付けるはずがないだろうな」

飯にあったとしても、そんなもんを利用するのはお前くらいだろう、と心の中だけでつぶやきながら真琴の様子を伺っていると、思った通りに真琴は残念そうにうつむきながらつぶやきを漏らす。

「あー……出来ればよかったのに」

「それで?」

「何が?」

「アホかお前は。さっきの話をもう忘れたのか」

がっくりとうなだれたままだった真琴に向かって、俺が先を促すように言うと、真琴はガバツと頭を上げた。

「だから、コンビニに行ったら、肉まんがなかったのよ」

「別に肉まんできゃいけないってワケじゃないんだろ」

「だから、なかったんだってば」

「たまにはあんまんとか言ってみたらどうだ?」

『肉まん大作戦』

「だから、何もなかったのよ」

「……何も？」

「そう、肉まんの蒸し器ごとなかったのよ」

「ああ、なるほどね…」

つまりは単純に肉まんの販売時期は終わったと言うことだよな。それにしても、それを理解するだけなのに何でこんなに時間がかかるんだ？

「やっと分かったようね」

「まあな。でも、それは当然の流れだろうよ。もう五月なんだから、この時期まで肉まん売ってる方が珍しいってものだ」

「あうー…先週はまだあったのに…」

先週まで置いてる方が珍しい。雪が消えた頃には、俺でさえ寒さを気にしなくなっていたし、いくら雪国と言ってもそんなものだろう。

「とりあえず冬まで待つしかねえな」

「ふ、冬まで？」

「そ」

「あうーっ、冬まで待てないよお」

「とは言っても、ないものはないんだから、我慢するしかないな」

ま、コンビニがその店だけとは限らないんだから、必ずしも冬まで待つ必要はないのだが、この際それは黙っておくでしょう。

「それに冬は寒いから嫌い…」

「寒いのは当たり前じゃないか、冬…」

冬なんだからなと軽く答えるつもりだった。だけど、俺の言葉はそこで詰まってしまった。

「真琴は…寒いのが嫌いだ…」

そこにいたのは、さっきまで冗談めいた口調で話していた真琴じゃない。

いまが冬であるはずもないのに、寒くなるとは言はずなのに、きゅっと自分の体を抱くように腕を組んだ真琴がいた。

寒いのが嫌い——その意味するところが何であるか、悩むまでもないな。記憶をなくしている状態であっても、真琴は覚えてるんだろう。冬に何があったのかを。

でも、それはもう過去の話ですまされるはずだ。この家に真琴の居場所があるんだからとにかくここで俺が深刻になる必要はない。いつもよりも少し軽い口調で俺はさっき途切れたのに替わる言葉を続けた。

「俺も寒いのが嫌いだ…肉まんは別か。あれは寒いときに食ってこそ、そのうまさ引き立つてもんだろ」

すると、ついさっきまでとは別人のように、真琴が怪訝そうな表情で返す。

「祐一に肉まんの味は分らないんじゃない？」

「コンビニ肉まんしか知らんヤツに言われたくはないな」

「祐一だって同じようなもんじゃないっ！」

確かにそうだ。いくら俺でも肉まんの味比べなんてやったことはないし、そもそもやろうとも思わない。だが、そんな俺でも確実に言えることがあった。

『肉まん大作戦』

「秋子さんの作ってくれた肉まんはおいしかったよな」

「うん…」

真琴が戻ってきた日に、秋子さんが作ってくれた肉まん（正確にはそれだけじゃないのだが）を腹一杯に食べたのは、当の真琴本人なんだからな。

「な？ だから、また秋子さんに作ってもらえばいいじゃないか」

諭すような口調で俺が提案すると、真琴はどうにも複雑な表情をしてみせた。その表情からは真琴が何を言いたいのか、今ひとつ俺には分からなかったたので、俺はそのまま言葉が続けることにした。

「ただし、毎日肉まんってのは勘弁してくれよな」

「あーっ」

困ったような表情でそれに答える真琴。

こいつのことだから、毎日でも秋子さんにリクエストするつもりだったんだろう。ま、こうして先に俺に言われちゃそれでオシマイってところだろうな。

「そんじゃ、さっそく秋子さんに言ってくるとするか？」

言いながら俺が椅子から立ち上がると、真琴もそれに合わせるように立ち上がりながら、短く答えた。

「うん」

それから俺はマグカップを手に取り、真琴と一緒に秋子さんのところまで行き、さっきまでの話の流れをかいつまんで説明した。

一通り説明した後の秋子さんの返事はもちろん「了承」の一語に尽きたが、思ったより

『肉まん大作戦』

も真琴がその返事を聞いて喜んでる感じがしないのが気になった。

まあ、秋子さんの返事なんてほぼ確定していたことだし、そこではしゃがないからって、あまり気にすることでもないだろう…と、俺が気を取り直して自分の部屋に戻ろうとしたとき、ふと秋子さんに軽く肩を叩かれた。

「祐一さん、あの子はあまり喜んでないみたいですけど、いいんですか？」

真琴が先に二階に上がっていったのを見計らうように、秋子さんはいつもよりわずかに怪訝そうな表情で、俺に向かってそう訊ねてきた。

俺と同じことを感じていた…と言うより、こんな風に秋子さんが心配そうに話すのも珍しい感じがする。

「たぶん、大丈夫ですよ。ただいつもの肉まんが買えなくなったことの方が、あいつにとっちゃショックでかいだけですから」

俺のところで暴れた様子を秋子さんが知ってるかどうかは別として、真琴の話からは単純にガツカリしてる様が見て取れるのは本当だ。

「いつもの肉まん？」

「コンビニで売ってるやつです。もう五月だし、さっきお店に行ったら、蒸し器ごとなかったとか」

「それは残念ね」

「でも、どうしようもないでしょう？ まあ、今日はすみませんが、おいしい肉まん食わせてやって下さい」

真琴は単純なやつだから、秋子さんのおいしい肉まんでも食べれば、それでひとまずは

収まるだろう。俺はそう思って、言葉と共に苦笑いを見せると、

「そうね。それじゃ腕によりをかけて作りますね」

小さくうなずきながら、秋子さんはいつもの笑顔で返してくれた。こっちも安心して、思わずつられて笑ってしまいうような、そんな優しい笑顔で。

「楽しみにしてます」

秋子さんにそれだけを残して、俺は自分の部屋へと向かう。

俺の部屋に真琴の姿はなく、そっと真琴の部屋の様子をドア越しに伺うとどうやら中でおとなしくしているようだ。

せっかくの穏やかな午後を台無しにされたのは、少しばかり釈然としないものの、少なくとも今日だけは勉強のことを言うのは勘弁しておくでしょう。

俺はそっと自分の部屋に戻り、さっきの続きとばかりに、読みかけのマンガ雑誌を手にとった。

そして、夕食どき。

秋子さんは期待以上においしい肉まんを作ってくれた。それも大量に。

真琴のやつはと言うと。

「いったただきまーすっ」

…と、まあ、こっちの心配がホントにいらなかったんだってことを、大げさなくらいに表現していた。

「また食べ過ぎでお腹壊すなよ」

「今日は平気っ！ 夕ご飯は秋子さんの肉まんって分かってたから、おやつも我慢したん

『肉まん大作戦』

だから」

やれやれ。

おやつを我慢ってあたりが子どもみたいと言うか、真琴らしいと言うかだな、こりゃ。ま、一応は忠告しておいたことだし、真琴も喜んでいるみたいだから、それでよしにしよう。

「わたしは百花屋で食べてきちゃったから…そんなに食べれないよ…」

たくさんの肉まんを前にして、名雪が情けない声を上げているが、そう言いつつ名雪の取り皿には肉まんが二つほど乗っている。

「その肉まんは何だよ？ 入らないって言う割には、欲張ってるじゃないか」

俺の指摘を受けて、名雪はわずかに顔を赤くして反論した。

「こ、これは食べなきゃいけない分なんだよ…」

素直じゃない言い方が、また俺のいたずら心を誘う。要するに、それだけは無理しても食べたいって言えばいいのによ。

「無理に食う必要はないだろ？」

「違うよ、無理なんかしてないってば」

と、俺が名雪とそんなやり取りをしていると、不意に名雪と俺の取り皿に肉まんがひよひよいと置かれた。

いや、別に肉まんを欲しかったと言うわけじゃなくて、単に名雪をからかっていただけなんだけどな、俺としては。

一体誰が…と思つて、周りを見ると、真琴が手を伸ばしていた。

「まだ肉まん一杯あるんだから、そんなことで言い合おうのやめなよ」

ぐっ…。

なにゆえ真琴に諭されなくちやイカンのだ！

と言うか、真琴がそんなことを言うなんて…まさにビックリだぜ。

俺ばかりか名雪も思いきり意外そうな表情で真琴を見つめていて、この意外さはさらに強調されている。

しかし、そんな風に呆気にとられる俺と名雪をよそに、真琴はまた自分の肉まんを幸せそうに口に運んでいるだけ。

「二人とも、何してるの？」

わずかに困ったような笑みを浮かべた秋子さんにそう言われるまで、少なくとも俺は動けなかった…。

いつもの真琴とはちよつと違う。だが、それが何なのか、今ひとつ俺には掴めなかった。そんな俺の中に湧き出た疑問などお構いなしに、結局真琴はずつと肉まんを嬉しそうに食べていた。

その後の真琴の様子には、別に普段と取り立てて違うようなところはなかったし、無理して食い過ぎたと言うこともなかったの、深く気にすることでもなさそうだと判断した。そして、夜も更けていき、あとは寝るだけと言う状態になった後。

眠くなるまでと思つて、ベッドに潜りつつマンガを読んでいたら、逆に目がさえてしまい、結果としてかなり遅くまで起きていたのだが、さすがに眠くなり始めて、マンガをベッドの脇に置いたとき、ふと廊下を誰かが歩くような気配に気がついた。

誰かと言っても、この時間はすでに名雪は爆睡状態であり、残るは真琴しかいない。俺の部屋に来る用事もないだろうし、大方トイレでも行ったんだろうとあまり気にせず、明かりを消して布団の中に潜り込もうとしたとき。

『ガッシヤアアアン、カンツ、カラカラカラ……』

『あうー……』

……何だ、いまのはッ！

何かをひっくり返したような凄惨な音と、最後の「あうー」はッ！

ようやく感じていた眠気など一瞬で消えてしまい、俺は暗いままベッドから飛び起きて、ドアへと一気に駆け出した……ハズだったのだが、俺が足を床に着いたと同時に思い切り蹴り上げた瞬間。

動かないはずの床がズルツと後ろに滑り、その反作用とばかりに俺の体はふわりと浮いていた。

「え？ な……」

何だ？ と言いつ終る間もなく、俺の体は床にダンツと打ち付けられた。

……いてえ。

どうやら、俺はベッドから飛び出したのと同時に派手に転んだらしい。

膝と手と胸と顔……とにかくあちこちが痛いのだが、気を取り直して何とか起きあがって部屋の明かりをつけると、さっきまで読んでいたマンガがベッドの下に飛ばされていた。さっきの「動く床」の正体はこれだったわけだ。

「チッ！」

今度からは寝る前にマンガを読むのはやめておこう。そう堅く心に誓いながら、俺は激しい物音のした方——音から察すると台所だ——へ向かった。

俺がややぎこちない足取りで台所を覗くと、すでにそこには秋子さんの姿があった。それと、鍋やらその蓋やら何やらに囲まれている真琴の姿も。

「どうしたんですか？」

秋子さんに向かって俺が訊ねると、秋子さんはやや心配そうな表情で俺に訊き返してきた。

「祐一さんこそ、さつきものすごい音がしたみたいですけど…」

「ははは…それについては、深く反省したばかりなので、触れないで下さい。で、この騒ぎはやっぱり？」

俺がその先を言わずに真琴の方に視線を向けると、秋子さんは目を閉じながらうなずいてくれた。別に怒っていると言う感じではなく、ただ単に呆れていると言うのが本音だろう。そもそも、秋子さんが怒っているのはあまり見たことがないしな…って、全然見たことないのであるか？

「それで、真琴…お前はここで何やってたんだ？」

「何でも…ない」

「何でもないわけないだろう？ ま、名雪にしてみりゃ、これぐらいの物音なんて気にならないだろうけどな」

言うまでもないが、ここには三人しかいない。俺と真琴と秋子さんだ。あれだけの物音

がしたのに、名雪が階段を下りてくる気配は微塵もない。朝になってこのことを訊いても「そんなことがあったの？」と逆に訊かれるだけなのは明らかだろう。

とまあ、名雪のことはともかくとして、俺が言いたいことはこんな騒ぎをして「何も無い」だけでは許さないと意味だ。その辺のところは真琴も十分すぎるほどに分かっているらしく、さっきから俺や秋子さんと視線を合わそうとはしない。

いたずらを見つかって怒られている…と言う感じじゃあないな、これは。もう少し深刻な感じだ。もっとも、その理由まではいまのところ分からないが。

と、俺が真琴の様子を伺っていると、不意に秋子さんが優しい口調で話しかけた。

「真琴は何か作ろうとしたの？」

「……ん」

「そう。夕ご飯は足りなかったの？ それとも、肉まん以外の何か食べたかったの？」

「ううん、そんなことはない…」

「じゃ、どうして？」

秋子さんの口調も態度も決して、詰問するなんて言うほど厳しいものでも強いものでもない。それに応じるかのように、真琴がそっと秋子さんを上目遣いで見つめ返し、小さいながら声を発した。

「…あう……あ、秋子さん……」

「なあに？」

自分から言ってくれることを待っていた（と思うのだが）秋子さんの返事も真琴に合わせるように、やや小さめの声。

しかし、それに続く真琴の答えは期待に応えたものではなかったらしい。

「…ごめんなさい……」

頭を下げながら、真琴はそれだけしか答えなかったのだが、そのとき微かに秋子さんが寂しそうな表情を見せたのは、俺の思い違いや気のせいばかりではないと思う。

「そう…。それじゃ、これ以上は訊かないことにして、まずはここを片づけましょうか」
すぐにいつもの笑顔に戻って、秋子さんはそう言うってから、すっと床に落ちていた鍋の一つに手を伸ばしていった。

「…うん…」

真琴もすまなそうにうなずき、鍋や蓋が散らばったままの床へと手を伸ばした。

こうなっては、俺も何も言わずに手伝うしかないか、と思って俺もすっと体を低くしよ
うとしたとき、秋子さんが鍋を一つだけ戻しながら言った。

「でも、わたし何だか眠くてしょうがないから：後は真琴にお願いしようかしら」

「って、あの？ 秋子さん？」

何でいきなり？ と訊き返す間もなく、秋子さんは笑顔で台所を出ていこうとしていた。

真琴の方は秋子さんの言葉に対して、下を向いたまま小さくうなずくだけ。

俺はどうすればいいんだろう？ と一瞬悩んでしまったが、台所から姿を消す間際に秋
子さんが、

「それじゃ、祐一さんには後はお願ひしますね」

とだけ言い残していった。

…なるほど。

要するに、真琴にとって自分には言いづらい理由があるのかも知れない…と秋子さんは判断したわけだ。それで、自分は眠いからとか俺に後をお願いなんて言ったわけだよな。

だいたいこんな場面なら、秋子さんが自分の都合（眠いとか忙しいとか）で真琴（に限らないだろうが）を放って置くわけじゃないか。ま、その辺を当の本人が分かつてるのかは…微妙なところだけだな。

どこまで聞けるかは俺にも分からないが、とにかく俺もどうにかしないとイケないよな。と言うわけで、俺は真琴の横に体を落とし、鍋を拾いながらひとことだけ。

「で？」

「ん…」

真琴の手も俺の手も止まることなく、床に散らばった鍋と蓋を集めている。何となく、真剣に向かい合って言うのが邪魔くさかったし、真琴もちやんと返事はしてくれましたので、そのまま俺は言葉が続けることにした。

「お前はホントに何やろうとしてたんだ？」

「肉まん……」

「肉まんならたくさんあったじゃないか」

「うん…。秋子さんの肉まん、確かにおいしいけど…」

語尾に「けど」とつくんだから、それに対してどこか納得していないと言うのは分かる。だが、秋子さんの肉まんがまずいはずはない。

「文句あったのか？」

「あー…そうじゃなくて、おいしいんだけど、一杯作ってくれて真琴は本当に嬉しかっ

たけど…」

「けど？」

俺が短く訊き返すと、そこで真琴の手が止まった。

一杯作ってくれたことや肉まんそのものの味に不満があるわけじゃない、と言うのは分かる。そして、確かに真琴がそれで完全に納得していないと言うことも。

だとしたら、真琴は何で満足していないのか。それこそは秋子さんが一番知りたがっていることだろうが、真琴にしてみれば秋子さんに一番言いづらいことに違いない。

手の動きが止まったまま、しばらく時間を置いてから、真琴はぼつりとつぶやくように、それを口に出した。

「…いつもの肉まんとはやっぱり違うから…」

「そうだな…。つと、そう言えば、あのとき俺と名雪んとこに肉まん入れたのは？」

「秋子さんが一生懸命作ってくれた肉まんだもん。残しちゃいけないなって思っ。真琴も一杯食べたけど、それでもまだあったんだもん…」

「バカだな、秋子さんはそんなこと気にする人じゃないだろ？」

「うん…でも、やっぱり、真琴が欲しいって言ったんだから…」

「お前の気持ちは分かるけど…それでも、どっちにしてもお前がコンビニ肉まん作るのは無理だろうし、秋子さんの肉まんだってまだあるんだし」

「うん…」

「ま、とりあえず、さっさと片づけて、寝ちまおうぜ」

「ん…」

『肉まん大作戦』

真琴の気持ちはよく分かった。

秋子さんに言えなかった理由も。

だけどな。

「だけど、こんな風にしゅんとしちまうのは、全然こいつらしくねえよ。と言うか、俺がこんな顔させちやいけねえんだよ。」

かくして——肉まん大作戦の始まりだ。

翌日。

学校から帰るとすぐに、俺は真琴に昨夜から今日一日じゅう学校で考えていたことを切り出した。

「大作戦？ 何それ？」

「お前がいきなり俺の華麗で壮大な構想を理解するのは難しかったか……」

「って、まだ何も言っていないじゃないのよっ」

「おお、そうだったか。まあ、それもコメディの常套手段だから気にするな」

何も話してないと言われても、とりあえず俺は納得していない表情のまま真琴を外に連れだして行った。

まず作戦第一号は「**街じゅうぐるっと大作戦**」だ。

ネーミングがよくないとか、何じゃソレは？ との突っ込みもあるかも知れないが、作戦名に漢字一文字当てるのはあまり縁起が良くないし、分かりやすい方が真琴にもいい。

早い話が、この街にあるコンビニを一店一店回っていこうと言うものだ。単純と言えばそれまでだが、これは戦術としては基本なのだ。何よりも、真琴には単純な方が説明しや

すい。

「…と言うわけだ。お前がいつも行くコンビニには置いてないことが分かってるけど、他の店にはあるかも知れないしな」

「うん、そうよねっ！」

一通り説明してみると、予想以上に真琴は納得した表情を見せて、どこかで売ってるかも知れないと期待しているのがよく分かった。

だが、その道のりは俺の予想と真琴の期待を大きく裏切って、とてつもなく険しいものだった。机上の空論だけで作戦が成功するわけがないのは分かっていたのにな。

そもそも意外にコンビニの場所を知らなかった。これは大きな障害だった。

埒があかないので、ひとまず俺よりは地元の情報通だと思ふ名雪に協力を頼もうと学校に行ってみたら、やはりまだ忙しそうだったので、諦めた。

香里でもいれば…と思っていたら、北川が偉くヒマそうにしているのを見つけて話をしたら、「学食二回」が北川の返事だった。ここで大事なものは「二回」であって、「たとえ(ば)A定食二つ」と言っていないことだ。

結局その後高度な交渉を重ねた後、北川に「学食一回」で情報をもらうことにして、そのおかげで六店舗ほどの名前と場所を知ることが出来た。

そこまではまだよかったと言えるだろう。北川との約束「学食一回」がどれだけの出費になるかが微妙な問題だが、そんなのは後回しだ。

問題になったのは、その移動量だった。

街中に展開してる店が少なく、幹線道路沿いに点々と存在する…それがこの街のコン

ビニの特徴だと言える…って、別に「自分の街のコンビニの展開について」なんて調査してるわけじゃないんだぞ？」

「早く行かないと、真琴の肉まんなくなっちゃうかも知れないじゃないっ」

真琴のやつは実際にどれだけの距離を歩くことになるのか、よく分かかってないおかげで無責任にそんなことを言ってくる。それにしても「真琴の肉まん」って何だよ？ 「真琴の」って。

「お前、どれだけ歩くのか分かってないだろ？」

「うん。でも、肉まんのためなら、真琴は平気よっ」

真琴の笑顔を前にして、無知とはある意味怖いなど真剣に思いながら、俺はそこまで言い切る真琴に対する反論を何も言えずに、北川に教わった店を目指して歩くことに決めた。だが。

時間と体力を使つて得たものは…靴擦れに痛む足と、それを大げさに痛い痛いと言いつつ騒ぐ真琴のわめき声だけだった。どの店にも肉まんなんて置いてなかったし、店員に訊いてみたところ、店によってまちまちで早く仕舞うところと遅くまで出しておくところがあると言ふ話だった。同じチェーンでもその辺の決めごととは店次第だそうだ。

こうして、作戦第一号は失敗に終わった。

「あー…肉まん…」

「まあ、気にするなって。作戦も第一号で成功したら、面白みに欠けるってものだろう？」

ヒーローが最後の最後に必殺技を使うのと同じで、最初から確実な作戦を出すのは禁じ手だからな」

「じゃ、まだやるの?」

俺の出した喻えが真琴にも分かりやすかったのか、真琴もまだ諦める気配を見せずに訊き返したが、さすがに続けては無理だ。

「当然だ。まあ、それを実行するのは日を改めてだけだな」

「うん：真琴も今日はもう歩きたくないし：」

そう言いながら、足をさするようにする真琴を見ながら、俺も苦笑いでそれに同意していた。何にしても、足の痛みが取れるまでは第二号は先送りだ。

そして、日を改めて作戦第二号の決行となった。

作戦第二号は「**もっと寒いところならきつとある作戦**」だ。

これはかなり期待できるはずだ。寒いところならあるに違いない、と真琴と二人で確信して電車に乗り込んで行った……まではよかったんだ。

だが、俺は肝心なことを忘れていた。

まずは、店によって肉まんを出している時期が違うと言うこと。これは同じチェーンでも言えることであって、要するに電車でちょっとここより寒いところに行っても、店の事情はほとんど大差ないということ。

それと、そもそも知らない場所に行つて、コンビニを見つけたこと自体が無謀だったと言うこと。結局、適当に降りた駅のすぐ近くの店しか行けないのだから、数をこなせばどうにかなるかもと言う可能性もほとんどない。

結果として、予算と時間ともにギリギリ行けるところまで行つてみたものの、どこにも肉まんは置いてなかったのだった。

『肉まん大作戦』

作戦第三号は「ええーい、メーカーにはあるに決まったらあ作戦」だ。

が、一介の高校生にそんなコネがあるわけないし、ダメ元で開き直って電話してみたが、やはりそこはオトナの対応をされて終わってしまった。

作戦第四号は「すみません、資金不足です作戦」だ。って、作戦じゃねえよ。もう金がないんだよ、金が。

「…と言うわけで、作戦四号は発動以前の問題でダメだ」

作戦会議をするつもりで真琴を商店街に連れだしてみたものの、財布の中身はすでに小銭の音だけで、そんな状態では作戦なんて考えてもしょうがない。

力なき理想は無意味…とか誰かが言ってたような気がするが、確かに真琴の希望をどうにかしたいか思ってみても、金がなけりゃ何も出来ないのが現実なわけだ。

「あー…真琴の肉まん…」

「しょうがないだろ？ 作戦も四号までいっちゃまったんだし、冬まで待つしかないな」

「…冬まで？」

「そ、冬まで」

「あうーっ」

いくら真琴が悲しい顔を見せても、実際のところ俺にはどうしようもない。あれだけ努力しても、何も得られるものがなかったのはくやしいが、少なくとも俺に出来るだけのことはやったと思う。

「マンガはいつでも売ってるから、とりあえずそれで我慢しろよ」

「あうー…」

『肉まん大作戦』

財布に残っていた数百円で、真琴の好きなマンガを一冊だけ買って、俺たちは帰途にいた。

そして、真琴は玄関の扉を開けたとき。

「あれっ？」

そんな声を上げた。

「どうかしたのか？」

俺が訊いても、真琴は神妙な面持ちで何かに神経を集中しているようで、何も答えない。

「おい、真琴？」

と、もう一度俺が声をかけると、真琴は突然嬉しそうに、

「肉まんようっ」

とだけ言い残して、あっと言う間に廊下の先の台所へと消えていった。

何がどうなったのか、俺にはさっぱり分からないままだったが、真琴が言い残した「肉まんよ」が気になった。

肉まんと言っても、もう秋子さんののは全部食ったはずだし、あいつがいまさらそれでの色を変えるはずもない。

が、ふと俺も気がついた。

かすかに漂っているのは肉まんの香りだ。

秋子さんが作ったのとは違う…と、言うことは、だ。

俺は頭の中に期待混じりの疑問符をたくさん浮かべながら、真琴に続いて台所へと向かった。

すると。

台所には、俺たちがさんざん探し回っていたものが鎮座していた。その中に真琴が望んでやまなかったものをたくさん詰め込んだ状態で。

「……な、何でウチに蒸し器が…」

台所にあったのは、コンビニでよく見る蒸し器そのもの。気がつくとき、かたわらにはすでに肉まんを手にして喜んでいる真琴もいる。

「真琴のにつくまーん！」

何が「真琴の」なんだかよく分からないが、とにかく俺は言葉を失っていた。だって、あれだけ探し回っていたものがうちにあるなんて…青い鳥じゃないんだから、そんなのはやめてくれて。それともアレか？ 幸せをもたらす花とでも言うのか？ そんなの誰も知らないネタだってばよ、アハハハ、俺も自分で何言ってるのか分からなくなってきたぞ…。

と、そこに秋子さんの声。

「二人とも、お帰りなさい」

「あ、秋子さん、これはッ」

挨拶もせずに俺はそれだけ言って、秋子さんの言葉を待った。と言うより、それ以上のことをする余裕はなかった。

「それはですね、知り合いから譲ってもらったんですよ。ほら、前に真琴がいつもの肉まんを食べたと言ってたでしょう？ だから、話してみたら、ちょうどよく程度のいい中古品があるからと言って」

「そ、それで、その中身は？」

「それも知り合いに相談してみたら、譲ってくれると言われたんですよ。冷凍保存しておけば問題ないと言うことで、たくさんもらってききましたら」

……ん？ 冷凍保存をたくさん？ それってどういう意味なんだ？

と、俺が秋子さんの説明にかすかに違和感を感じていると、真琴のやつが突然話に割り込んできた。

「たくさんあるの？ じゃあ、真琴がたくさん食べてもいいの？」

「ええ、いいわよ。でも、食べ過ぎないようにしないとね」

「うんっ、じゃあ、いまはこの二つで我慢しておくっ！」

元気にそれだけ言って、本当に嬉しそうに真琴は両手に肉まんを一個ずつ持っている。

そこには、さっきまでの沈んだ雰囲気なんて、これっぽっちもありません。

元気にはしゃぐ真琴の姿。

それは俺が叶えてやりたかった。あれだけの手間と苦勞をしたのは……一体何だったんだろう……と思ったとき、ふと俺の口からため息がこぼれていた。

「ふう……」

「祐一さん」

俺のため息を気にしたのか、秋子さんがそっと声をかけてくれた。いやまあ、確かに俺としても素直に喜ぶべきだろうな。俺には出来ないことでも、秋子さんなら出来ることってのはいくらでもあるわけだしな。

「いえ、何でもありません……とにかく、ありがとうございました」

どうか秋子さんに礼を言うと、秋子さんはいつもの笑顔よりもさらに優しい笑顔で、そつと俺に言った。

「あの子のために祐一さんが色々頑張ったから、わたしもちょっとだけお手伝いをさせてもらったんです。だから、これは祐一さんの努力の結果なんですよ。本当にお疲れさまでしたね」

「な……」

そこで俺は本当に言葉を失った。いや、何も言う必要はないんだろう、きつと。秋子さんは何もかも分かってくれているし、真琴も喜んでいる。

それじゃ、俺は？

…ここで一人で腐る必要はないよな、本当に。

と、言うことは、だ。俺も笑っていればいいってことだよな。

「俺も一個もらつていいですか？」

「ええ、どうぞ。たくさんありますから」

「またも「たくさんある」と言う言葉に微かな違和感を感じつつ、俺は蒸し器から肉まんを一個取り出そうと、まずは場所を移動した。

そのとき、それまで視界に入っていなかったものが、己の存在を激しく自己主張していることに気がついた。

銀色に光るその意味するものは、さっきから秋子さんの言葉に微かに感じていた違和感の正体だったと言つてもいいだろう。

広めとは言え、所詮は普通の家庭の台所だ。そこに場違いなくらいに存在を主張して

るのは、大きめの扉についた小さな取っ手がチャームポイントな冷凍庫——それも業務用の冷凍庫だったのだ。

確かに「たくさんありますから」と言えるわけだ。

どこをどう工事して、それを収納したのか分からないが、とにかく業務用冷凍庫は水瀬家の台所に収まっている。

「どうかしましたか?」

秋子さんにそう訊かれても、俺はどう答えていいか分からない。…何と言うか、秋子さんの行動力と言うかその発想の豪快さに、ただ平伏するだけだな、これじゃ…。と同時に、こんなことを目の当たりにして、あまり動じることのなくなってきたことにもわずかに怖さを感じていた。

人間、暑さも寒さも慣れるのと同じように、こうしたとんでもないことにも慣れてしまふものなんだよな、きつと……。それでいいのか悪いのかは、俺には今ひとつ分からないんだが……。まあ、いいや。肉まん大作戦は第三号改（実行者は水瀬秋子）によって、無事大成功をおさめたと言うことで、いいじゃないか。

「いえ、何でもないですよ」

軽く秋子さんに答えながら、俺は肉まんを口に運んだ。

正直言って秋子さんには申し訳ないが、それは俺がいままで食べた中で、一番うまい肉まんだった。肉まん大作戦、パンザイ!

『肉まん大作戦』

あとがき

コメディです。オチについては、祐一の言動でかなり変わって来るんですが、ひとまずいまの形になりました。

それにしても、季節外れな話です。時系列は一連の真琴のシリーズそのままです（作中は五月）し、展開としても特に分岐してゐるつもりはないので、これがそのまま続きのものとなります。それ以前とはややキャラの動きに違いを感じるかも知れませんが、作品ごとに雰囲気は違っている程度はご容赦願います。

2001/02/15 初版 a s h

PDF書式変更:2016/05/22